

ND2004

(5) ND2004 に参加して

九州大学

渡邊 健人

watanabe@kune2a.nucl.kyushu-u.ac.jp

核データ国際会議 ND2004 が米国ニューメキシコ州サンタフェで9月26日～10月1日の日程で開催されました。レジストレーションを行うために列に並ぶと、前の方がちょうど井頭先生であられ、先生から突然「核データニュースに、学会に参加した若手の意見、感想を自由に書いて欲しい」との依頼がありました。先生方のように豊富な専門知識があるわけでもなく、今までの核データ界の沿革を知っているわけでもありませんが、自由に参加して感じたものを書いてみたいと思います。

まず、学生でありながら、国際会議に参加できたことに感謝します。誰もが経験できることではないと思いますし、実際、会場でも学生の姿はあまり見ませんでした。(n,xn) DDX の測定に LANSCE の核破砕中性子源を使わせて頂いているので、サンタフェまでの道のりは初めてではありませんでした。しかし、出国して海外に行くというのはいつも胸躍るものがあります。ポスターケースを片手に福岡空港から発つときには誇らしい気持ちでした。

私が ND2004 に参加してみて感じたことは、自分の足りなさ、不勉強さでした。出発時の誇らしい思いが打ち砕かれた感じです。専門知識の無さと共に、何かを得ようとする積極的な姿勢、コミュニケーション力、英語力の無さなど自分の足りなさがあらわになりました。学会中、オーラルの発表を聞いていても、ネイティブの方は特に、何を言っているのかさっぱりわかりません。パワーポイント、アブストラクト集、そして時折聞き取れる英単語をもとに発表内容を理解しようというよりも想像していました。「よくわからない」とかといって質疑応答の時間に質問する度胸はありませんし、的外れな質問をして無駄に時間を費やしても良くないだろうと自分に言い聞かせていました。ポスターセッションのときも先輩に連れられてあちこち回る始末。また、日本人だけに話しかけたり、内輪だけで集まったり、折角の国際会議なのに何をしに来たのやら。自分のポスター発表のときも Uppsala の研究者にもっとアピールすることはできたし、議論もできたはずでした。準備が足りなかった、できないのではなくてやろうとしなかったと反省しています。

次に、研究する上で成果を出し、結果を残すことは当然のことと思いますが、学会というそれらの発表会の場で、核データに携わる人たちの人柄に触れることができたように思います。閉会式の時、チェアマンである Robert C. Haight 氏が会の運営に携わったスタッフ一人一人の名前をあげ、拍手で参加者全員の労をねぎらう場面がありました。そこには、ただ自分の研究成果を発表しに来ただけでなく、世界中から集まってくる研究者のために、この ND2004 を人の見えないところで支えてくれた人、会が円滑に進行するように働いてくれた人がいました。

このとき、人は誰のために、何のために頑張ったのかで受ける賞賛が違ってくるといふことを感じました。野球界には、長嶋茂雄という一人のヒーローがいます。リアルタイムでそのプレーを見ていたわけではありませんが、存在感があり何か好感がもてます。本塁打数、安打数などの通算記録を調べてみると、意外なことにそこまですごい記録ではありません。しかし、野球界を思い、力をつくして頑張るから野球界の中心人物なのでしょう。野球界に関わる人たちを思う、まさに人柄、人格がそうさせるのでしょう。ND2004 の閉会式の時の拍手も、自分のためだけでなく ND2004、核データ界を思う方たちに対する惜しみない賞賛でした。

おそらく、この国際会議に参加されていた方たちは実績があり、“切れ者”の研究者揃いであつたと思います。その発表内容がどれくらい優れていたのかはわかりませんでした。これから更に研鑽を積んでいくときに、思い知られるときが来るかもしれません。自分のために研究をして自分からのみ賞賛を受ける、これは何となく虚しさを感じます。次のチャンスがあるのかどうかはわかりませんが、次回には知識を蓄えると共に人格も磨きながら、発表を通じて知識の共有、研究の交流だけでなく、人との交流まで為せたらうれしく思います。



最後に、取るに足りないですがマイク持ちという形で ND2004 のために役立てたことを光栄に思います。しっかりアルバイトの方は頂きましたが・・・。

ボブさんとの記念撮影（左：筆者，中央：ボブさん，右：先輩）